

藩老横山家の3枚の下屋敷図について

木越 隆三・池田 仁子

はじめに

城下町金沢の空間構造を、矢守一彦が提示した五類型に即していえば「内町・外町型」と分類できるが^①、近年は街路や町割から窺われる独特の複合構造も注目されている。金沢の武家地配置を大きく見ると、金沢城を中心に上級家臣から下級家臣へと同心円もしくは渦巻き状に配置され、その同心円構造の骨格を作っているのが、慶長年間に築かれた二重の惣構堀であった。この惣構内部に、ほぼ直線の北国往還や宮腰往還が貫通し、街道の両側には町地が設定され、初期からの特権的町人などに屋敷地を与えた。犀川・浅野川の外側には元和・寛永頃に寺院群が形成され、城の東側に位置する小立野台地の寺院群とあわせ三寺院群と呼ばれ、足軽・小者の組地と同様に城下外縁部に配置されている。

このような城下町金沢の中であって、「加賀八家」と呼ばれる、藩老の上屋敷と下屋敷が形成する独特の空間は、「小城下」的景観を示すと20年前、吉田伸之が初めて指摘した^②。加賀藩前田領で下屋敷というのは、知行3千石以上の「人持組土」に許された拝領地で、一般的には、彼らの陪臣団が集住する武家地とされる。40人近くもいる、下屋敷を公許された上士の屋敷と、その下屋敷地が形成する、大小さまざまな小城下の空間が埋め込まれているため、空間構造に独特の複雑さが醸し出され、これも城下町金沢の特徴とされている。しかし、「小城下」的な複合構造に関する研究は、この20年さほど進展していない。最近ようやく、前田土佐守家の下屋敷空間について基本的事実が紹介され^③、また下屋敷配置の多様さに注目し、(A)上屋敷と隣接するタイプ、(B)上屋敷と分離しているタイプ、(C)城下周縁部に数家の下屋敷が密集するタイプ、の三つに分類し、小城下の空間の形成時期が検証されるなど^④、関心が高まりつつある。

加賀藩では八人の藩年寄が権勢を持ち、八人とも1万石以上の知行高をうけ、「従五位下」の官位と、「安房守」・「山城守」などの官職を、幕府から格別に許された（陪臣叙爵）。彼らは人持組頭となり、藩の年寄衆にも登用された、最高家格の藩士であったが、この八家制が確立したのは、元禄3～15年（1690～1702）頃であった。八家は1万石未満の一般藩士と異なり、武家屋敷拝領歩数規則の基準が適用されず、江戸初期より、藩主から格別に広大な屋敷地を拝領していた。また下屋敷の利用形態も、詳細にみてゆくと、陪臣住居だけに限られていない。加賀八家のうち横山家（3万石）・前田土佐守家（1万石）の下屋敷の場合、庭園や別荘（隠居所）、米倉、塩硝蔵（弾薬庫）、角場（射撃練習場）、馬場、的場（弓の稽古場）などの施設が混在していた^⑤。さらに、横山家の下屋敷については、3点の下屋敷図が残っていたので、城下町絵図も援用すると、下屋敷の変容過程や、どのような階層の陪臣団がどういう集住の仕方を行ったのかも窺えるのである。

藩の年寄職を歴任した加賀八家、横山家の陪臣団の構成や人数については、すでに『金沢城代と横山家文書の研究』研究編3章（金沢城研究調査室編、2006年3月刊）で概要を紹介した。足軽以上でみると、400人を超える陪臣団の名前が、明治元年の「分限帳」などから判明するほか、横山家中（陪臣団）の「先祖由緒一類附帳」が29点、横山家文書の中に残っていた^⑥。これらも活用し、横山家の3枚の下屋敷図について、そこに書かれた陪臣名を手がかりに、それぞれ景観年代を特定し、相互の比較検討を行いたい。

また、まだ調査中であるが、加越能文庫の約1万2千点にのぼる「先祖由緒一類附帳」の中にも横山家陪臣の由緒書が多数残っていた。明治元年「分限帳」に載る、460人の横山家中（与力含む）と一致する家を、予備的に点検した結果、192家ほどが横山家中の由緒書であることが確認できた。横

山家文書の中の、29家の「先祖由緒一類附帳」との重複はあるが、これらも活用すれば、横山家陪臣団の姿がより広く把握でき、下屋敷図の考察に援用する範囲も広がる。

以下では、これまでの調査の結果、横山家に残る3点の下屋敷図の景観年代がほぼ特定されてきたので、まずは景観年代特定の推論過程や、絵図に記載された陪臣名など文字情報を紹介したい。また、昨年報告した『金沢城代と横山家文書の研究』（加賀八家、横山家文書約千点の古文書目録、重要史料も翻刻した）で言及できなかった所の補足や不備も是正したい。こうした基礎作業は、今後、城下町金沢の複合的な空間構造を解明する上で、不可欠な作業と考えており、今後の調査に益するものと期待している。

なお、この下屋敷図を所蔵される横山隆昭さんから、調査にあたり多大な便宜をいただいたので、ここに篤く感謝申し上げたい。平成16年以来調査させていただいた横山家文書については、昨年いちおうの形にまとめて報告したが、多くの課題も残っていた。その一つを、このような形で報告することで、横山さんの調査研究事業にたいする、ご理解とご協力の気持ちに応えたいと考える次第である。

1 3枚の下屋敷図の景観年代について

横山家の下屋敷拝領に関する最古の史料は、慶長16年(1611)9月の武家屋敷地法度であり⁽⁷⁾、1万3500歩が下されたとあるが、位置については明確ではない。「寛文七年金沢図」「延宝金沢図」をみると、浅野川上流に沿って横山家下屋敷地が位置するので、その一帯、とくに東外惣構に近い区域が、慶長段階から横山家下屋敷地とされたと想定される。明治以後、横山町と呼ばれた浅野川左岸の一角であるが、慶長期においては、田井村などの田畠が入り組む田園地帯であり、当初は農地と武家屋敷が混在する景観であったと推測される。

横山家の上屋敷は、慶長・元和の頃は城内の三ノ丸や新丸にあったといい、元和・寛永期以後、元禄9年(1696)までは小立野台地の本多邸の向い側(現在は兼六園内)にあったが、元禄9年に浅野川べりの下屋敷地に上屋敷を移し、その分、下屋敷地が浅野川に沿って、南東部に拡張されたのであろう。3枚の下屋敷図に描かれた上屋敷の総面積は、8288歩(宝暦9年頃、A図)、7151歩(明和・安永期、B図)、7605歩(文化年間、C図)となっており、寛文七年図、延宝図にみえる上屋敷地の総面積約4千歩の倍に増えたことがわかる。元禄9年の上屋敷移転で、上屋敷は規模が大きくなり、余裕をもって、家作や庭作りがなされたと予想できる。

ここで比較検討する下屋敷図3点は、いずれも元禄9年の上屋敷移転後の図面である。この3枚の絵図に記載された陪臣名を解読し、一覧にしたのが2節本文に掲げた〔表3〕で、仮に下屋敷地を24区に区分し、仮地番を付し、3枚の絵図に示された陪臣名等の変遷が比較できるように表示した。この3枚の比較検討をすすめるには、3点それぞれの景観年代を特定する必要があるので、それぞれに記載された陪臣名のうち、「先祖由緒一類附帳」が残存する人名を検索し、彼らが同時期に存在した時代を絞り込むことで、年代推定を行った。そのプロセスを、ここで紹介したい。

まず、横山家の3枚の下屋敷図の名称・サイズなどの概要と、結論としての景観年代を示せば、以下のとおりである。なお『金沢城代と横山家文書の研究』(44～45頁にA図・B図、口絵にC図の写真を掲載するので参照されたい)で、下記のA図・B図について「無彩」と表記したが、これは間違いで、両者とも淡彩ながら道路や水路・溝などに彩色がなされていた。訂正しておきたい。

(A)「横山家上屋敷・下屋敷の下図」2枚：宝暦9年(1759)頃 史料目録(八)絵図-21・22号

本図は横山家の下屋敷地を2つに分割して描いている。1枚目(128×230cm)は上屋敷ほか知行取の上級家臣が集住する北西地区(写真1～10区)を描き、もう一枚(150×155cm)は中・下級の陪臣団が居住する南東地区(写真11～24区)を描く。2枚とも貼り合せや貼紙が随所にみられ、筆跡も数種類確認され、当初の形状を復元するのがきわめて難しい状態にある。

貼り重ね状態を観察し、筆跡比較などを行った結果、本図は最初、街路・水路や上屋敷の泉水な

どを彩色して描き、下屋敷地の骨格を示したあと、個々の陪臣名・面積・区割線などは貼紙によって仕上げたものと推定される。成立当初の貼紙の下に、より古い街路などがみえ、成立当初の複雑な事情が窺われる。陪臣名などを貼紙で示した当初の下屋敷図が一旦仕上がったのち、一定年限ののち、陪臣屋敷の変動の様子を示すため、新たに貼紙で名前や面積・区画線の更新を行っている。このように訂正追記された新しい貼紙の上に、また貼紙がなされた箇所もあり、修正が二重、三重になった所もあった。筆跡も一様でなく、成立当初の複雑な事情に加え、その後の改訂も複雑であることが、本図の復元を難しくしている。

[表3]の表示にあたっては、当初と推定される貼絵図に書かれた陪臣名については、筆跡の違いによりa・b・c・dと仮に区別した結果を表示した([表3]の「貼紙」欄)。a・b・c・d いずれかの記号のある陪臣屋敷は、本図作成当初に描かれた氏名と推定している。その後、居住者が変化したため貼紙され、その上に記載された陪臣名については△印を付した。その上にさらに訂正を加えた事例については、これを識別する表示は略した。したがって、△印の中には二重に訂正されたものが、いくつか含まれている。なお、▲印を付した8例は明治元年「分限帳」の名前と一致するものである。また、区画だけの修正や面積訂正だけの修正もあったが、その点も今回は違いを表示できなかった。

(B)「横山家下屋敷図」：明和5年～安永6年(1768～77) 148×163cm 史料目録(八)絵図-23号

薄手の一枚に北西地区と南東地区をまとめて描く。陪臣屋敷地のかなりの部分に貼紙がなされているので、当初成立した絵図に、その後の居住者変動の情報が追加記入されたものとみられる。したがって、[表3]の表示にあたっては、貼紙の上に書かれた陪臣名については△印を付け、絵図作成当初に書かれた名前ではないことを明示した。また、氏名に変更はないが、区画線や面積だけに訂正の貼紙がなされたものには、□印を付し、作成当初の記載から変化した情報であることを示した。しかし、□印の場合、陪臣名そのものは当初の人名のままなので、絵図の景観年代の比定を行うときは、□印の陪臣名も無印の陪臣名と同等に扱った。

(C)「金沢城下横山家上屋敷・下屋敷絵図」：文化13年(1816) 75×83cm 史料目録(八)絵図-24号

本図は3点のなかでは最も小型であるが、貼紙がなく彩色された仕上がりによりよい絵図である。横山家当主に提出された下屋敷図の清図に近いものと推定される。上屋敷の泉水や表御門・裏御門・小嶋口・向坂口・馬場などが明瞭に描かれるほか、背後や両脇に給人(知行取家臣)屋敷が凹形に取り囲み、西側には横山家の家老クラスの重臣屋敷(高沢家794歩、横山武右衛門家546歩、上田家450歩)が並ぶ。上屋敷の東隣に米蔵屋鋪、南側前方に杓蔵屋鋪が置かれ、南東地区に目を転ずると、的場・塩硝蔵屋鋪・塩硝干場などがあった。景観年代も、横山家に残る「先祖由緒一類附帳」に合致した14家について検討を行った結果、文化7～13年であることが判明した。

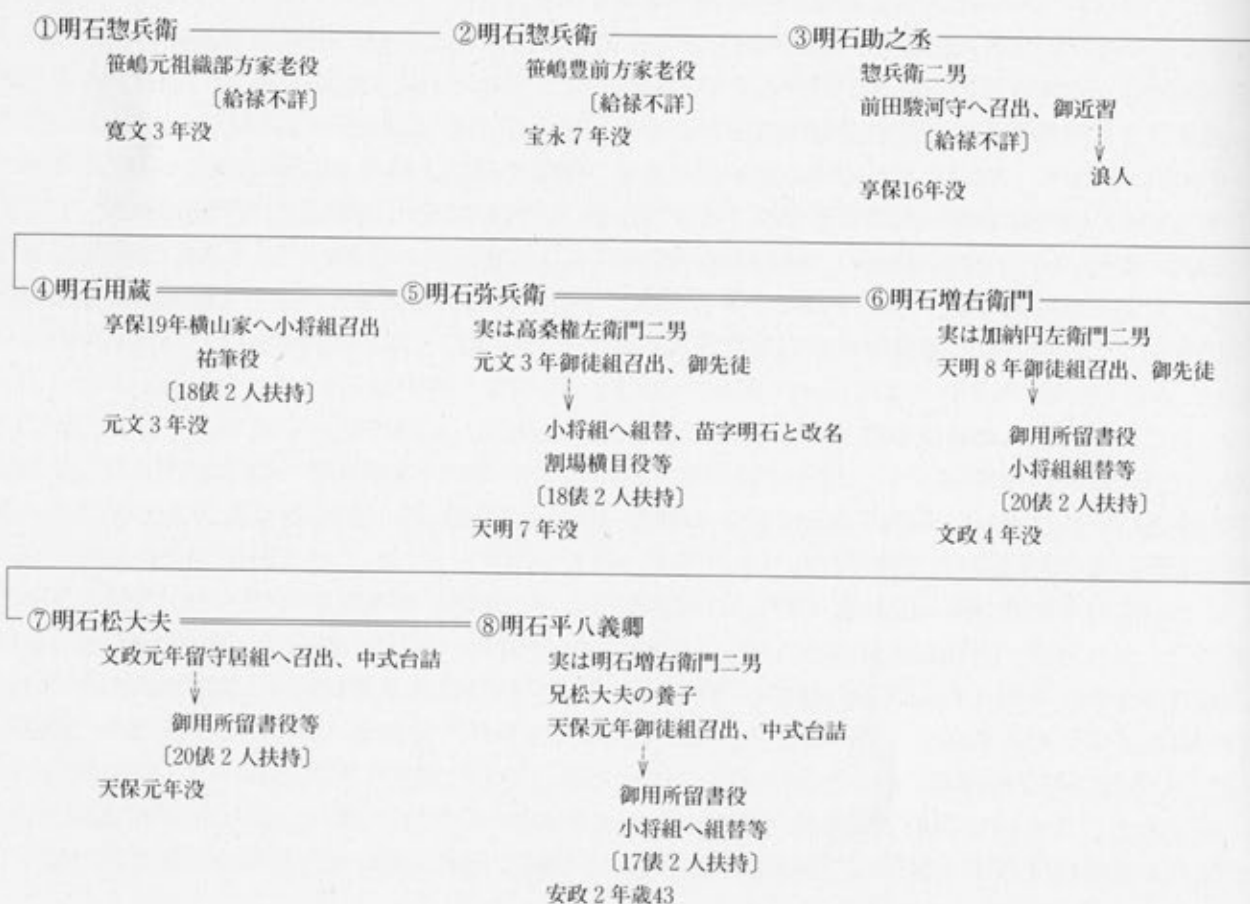
つぎに、それぞれの景観年代を特定した手順を紹介したい。まずC図からみていくと、C図に記載された陪臣人数は188人で、このうち横山家文書に残る29点の「先祖由緒一類附帳」に該当する家が14家あった。この14家の家臣名とC図上の地番(分析を円滑に行うため調査者が独自に付与)・面積(歩数)などを[表1]に掲げた。

この14家の「先祖由緒一類附帳」から、C図に載る当主が活躍した時期が判明したので、[表1]に掲げた。たとえば、明石家の場合でいうと「先祖由緒一類附帳」から判明した歴代の系譜は参考系図の通りであり、このうち6代目の増右衛門がC図(1区3番居住)に掲載されるので、彼の跡目相続(召出)年と死没年を[表1]に掲げた。こうして特定された14人の、当主として活躍した期間を、[表1]を使って比較すると、14人が共通して当主であったのは文化7年(1810)から13年の6年間に限られた。これがC図の景観年代である。この6年間のうち文化13年(1816)に、横山家11代目の隆章が家督相続しているので、隆章への家督相続を契機に作成された文化13年の下屋敷図である可

[表1] C 図掲載下屋敷陪臣の「先祖由緒一類附帳」14家比較表

下屋敷図24号 家臣一覧			(横山家文書より)			
区域一地方番	家 臣 名	坪 数	召出・相続年	隠居・死去年	給 禄	主 な 役 職 等
1-3	明石 増右衛門	83	天明8年	文政4年	20俵2人扶持	御徒組、御用所留書役
22-15-A	井村 多左衛門	16請地	寛政10年	文政3年	7人扶持	小將組
22-15-B		80				
24-1~2	梅村 権六	80	明和7年	天保4年	9人扶持	御歩組、小將組
7-1	小国 源右衛門	394	寛政6年	天保3年	130石	御荷用役、鉄炮足輕頭
17-8	高桑 市右衛門	105	寛政10年	文政3年	17俵2人扶持	小將組、下屋敷引越番人
5-7-A	太宰 孫助	171	文化6年	嘉永元年	180石	奥小將組、小將頭
5-7-B	太才 孫助 請地	87				
14-3	中嶋 漸太夫	80	寛政9年	文化14年	9人扶持	小將組、御膳番役并台所向俵約方
22-6	西沢 貞蔵	99	文化元年	嘉永3年	9人扶持	御荷用役、式台番
4-5	長谷川 淳八	156	寛政6年	天保6年	120石	御荷用役、式台取次役
20-8	二口 冬蔵	80	寛政元年	嘉永6年	60石	奥小將組、外茂介様成立主附
8-4	古河 伝蔵(永休)	199	安永3年	文化13年	100石	奥小將組、御弓師範
23-3	堀 淳吉郎	194	文化7年	文化13年	100石	奥小將組、納戸役加人
13-3~4	堀 八郎大夫	423	寛政7年	嘉永4年	140石	御荷用役、表造営普請御用取次主附
23-2	村田 千助	200	享和2年	文政13年	70石	奥小將組、御城方御用

(参考系図) ※ —— は養子関係を示す



能性が高い。

B図、A図も同じ方法で景観年代を割り出したが、B図・A図には貼紙があるので、貼紙されていない絵図成立当初の陪臣名を抽出し、年代推定の素材とした。B図には207人の陪臣名が記載されており、このうち27点27家の「先祖由緒一類附帳」が、B図に掲載された陪臣と合致した（加越能文庫13点・横山家14点）。このうち貼紙されていない当初の陪臣16家について、C図と同様の方法で比較を試みたところ、景観年代は明和5年（1768）～安永6年（1777）となった。この9年間のうち、安永6年に横山家9代隆従に代替わりがあったので、安永6年に、代替わりを契機とする下屋敷図の改訂がなされた可能性がたかい。貼紙のある11家のうち荒木太郎大夫以外は、この想定と矛盾しないが、荒木太郎大夫の場合、貼紙訂正があるので代替わり前の「安永4年没」となっているの、齟齬が生じる。この点は今後の課題としておきたい。

A図には、240人の陪臣名が記され、異筆ながら「大膳様御屋敷」912歩や「引馬屋敷」670歩という記載も含まれていた。A図の陪臣名と一致する「先祖由緒一類附帳」については、25点（加越能文庫15点、横山家10点）21家分が確認された。21家のA図に掲載された当主名を〔表2〕に掲げたが、このうち4家（△印）については、後年の貼紙の上に書かれたので、これを除く17家の当主の、召出年次と隠居・死去年を比較すると、宝暦8年（1758）から明和元年（1764）の間にA図が作成されたとわかる。さらに貼紙されている4家についても検討すると、4家の当主が揃って活躍する時期は、宝暦13年以後のことなので、A図の作成時期は宝暦8～13年と、さらに限定できる。この期間の横山家当主は8代隆達（隆達）の時代であり、この頃発生した大事件として宝暦9年の金沢城下の大火災がある。

宝暦9年の火災は城下町史上最大の大火といわれ、城下町の空間構造にも少なからぬ影響を与えた。

〔表2〕 A図掲載下屋敷陪臣の「先祖由緒一類附帳」リスト

（横山家文書・加越能文庫蔵書より）

区域・地番	貼紙	家臣名	坪数	召出・相続年	隠居・死去年	給 禄	主な役職等
1-1	a	神戸 吉左衛門	176	享保4年	～ 天明7年	15俵2人扶持	小姓組
1-3	a	明石 弥兵衛	83	元文3年	～ 天明7年	18俵2人扶持	割場横目役
2-3	a	石黒 新左衛門	167	元文2年	～ 寛政2年	80石	炉ノ間詰頭分
4-4	a	松山 弥一右衛門	202	享保13年	～ 天明8年	150石	小姓頭
4-9	a	山北 六郎	137	宝暦4年	～ 明和7年	80石	（職務不記）
5-1	a	平手 五郎左衛門	416	宝暦8年	～ 天明3年	300石	鉄炮足軽頭
5-5	a	高倉 権太夫	170	（宝永元年以前）～明和元年隠居（同4年没）		10人扶持	鷹方取次役
5-6	d	小嶋 新九郎	240	寛延3年	～ 安永6年	180石	城中御使奏者役
6-3	d	荒木 太郎大夫	199	延享元年	～ 安永4年	100石	奥小將組支配
6-5	a	上田 宗右衛門	490	延享4年（別本は元文4年）～天明6年		400石	家老役
7-1	a	小国 左源太	394	元文3年	～ 寛政6年	130石	小姓組、鉄炮足軽隊
8-4	d	古河 九郎兵衛	199	寛保2年	～ 安永3年	80石	式台増詰
13-1	a	山倉 清右衛門	128	享保10年	～ 明和元年	13人扶持	御組才許勤方役
13-3	a	堀 昇助	383	寛保元年	～ 寛政6年	120石	小姓頭
17-8	△	高桑 喜助	105	宝暦12年	～ 寛政11年	17俵2人扶持	公義御用書写方棟取
19-3	△	小川 仙次郎（遊閑）	253	宝暦9年～文化14年隠居（文政8年没）		110石	御徒頭御用人
20-1	△	入江 兎左衛門	142	宝暦13年	～ 文政2年	70石	近習頭
21-2	a	沖田 市次	62	寛保元年	～ 明和8年	銀130目、2人扶持	留守居足軽
22-6	a	西沢 庄左衛門	89	宝暦5年	～ 享和3年	7人扶持	式台増詰
22-15	△	井村 多左衛門	96	寛保3年	～ 文化元年	7人扶持	露地御用
23-2	a	村田 右内	200	元文5年	～ 天明3年	70石	御荷用役、留守居組支配

横山家の上・下屋敷もすべて灰燼に帰している。この大火で横山家ばかりでなく、陪臣の家に伝来した多くの書類が焼失しているので、おそらく下屋敷図も焼失したものと推定できる。火災後、本図の作成が計画されたのではないか。火災直後の作成であったため、火災前の下屋敷の街区割をまず再現描写することが優先されたはずで、本図は作成当初から大火前の下屋敷の状況と、大火後に変化した下屋敷の状況を併せて描いたため、複雑な貼紙で構成された絵図となったのであろう。宝暦大火後、大火前の姿とともに、大火で変貌した下屋敷の状況も示そうとしたことが、A図の作成目的なのではないか。

であれば、A図は宝暦大火を契機に、下屋敷地がどのように変容したか窺える貴重な絵図資料ということになる。また、A図の3区に載る陪臣8人(表3▲印)については、明治元年の人名であることから、米蔵から陪臣屋敷に変化したのは、C図作成以後と推測されたので、本図については、今後のより詳細な検討が不可欠となろう。

陪臣屋敷以外の建物としては、多数の番所が要所に置かれ、下屋敷地において厳重な通行管理がなされたことがわかる。「明地」「請地」「上げ地」「拝領地」という表記も多数みられ、大火を契機に屋敷地を取り上げ、別人に下付する行為が頻繁になされていたことも窺われる。また、拝領した屋敷地だけで不足すれば、明地を借用し、地代を払ったが、その場合は「請地」とされたのであろう。

上記により景観年代が特定できたが、宝暦大火を契機にA図が作成されたあと、多数の貼紙などで変容を記録していたが、間もなくB図を作成し整理したのであろう。その後B図上に変化した箇所を貼紙で補訂していたが、文化年間になって新たにC図を作成したのである。この間に横山家の下屋敷景観が、どのように移り変わったのか、今後の比較検討で多くの事実が判明するものと期待される。A図・B図・C図に書かれた文字情報を、区画ごとに一覧した[表3]を基礎データとして掲げたので、今後より詳細な分析がすすむことを期待している。

最後にA図・C図にみえる「大膳様御屋敷」や「横山輔八郎様」・「(横山)引馬(様)」屋敷について言及し、拙い紹介を閉じたい。

A図に見える「大膳様御屋敷」912歩は、[表3]で、その後の変遷を追ってみると、B図では空欄なので明地であったと推定され、C図では「横山輔八郎様」屋敷に変化している。輔八郎は、大膳隆美の嫡男であり、文化10年(1813)に兄大学の養子となり、天保12年(1841)に死去した横山家傍流の藩直臣である⁽⁸⁾。輔八郎の家督相続時期とC図の景観年代(文化7～13年)は一致するので、C図の景観年代の傍証となる。また、輔八郎の父大膳隆美は最初、資之助(「諸士系譜」では「才資」と称し、横山隆達(8代目)の男子で、9代隆従(義四郎)の3番目の弟であった。天明5年(1785)奏者番となり、藩主より新知1000石拝領し、公事場奉行などを歴任したあと享和2年(1802)に死去した⁽⁹⁾。この大学隆美の屋敷は、いつ頃まで下屋敷にあったのだろうか。新知を拝領した天明5年以後は、下屋敷を出て、城下のいずれかに屋敷地を拝領し、移転したと考えられる。B図で「大膳様御屋敷」が空欄になったのは、そのためであり、B図が明和・安永年間の景観図であることから、天明5年以前に、横山大膳は下屋敷地内にあった屋敷から他に移った可能性が高い。またA図の「大膳様御屋敷」の筆跡は当初のものと異なるので、大膳隆美が「大膳様御屋敷」に居を構えたのは、宝暦大火後間もなくであり、明和年間頃の可能性が高い。

また、C図にみえる「横山引馬様」670歩とある横山引馬は、横山家9代隆従の末弟(豹蔵)であり、のち隆誨を名乗る人物である。彼も横山家庶流であり、天明6年、前田本家の小姓に召し出され、同年大小姓組500石取の藩直臣となり、文政2年(1819)まで奉公している。A図にも「引馬」屋敷が掲載されているが、B図では同じ区画に5人の陪臣屋敷があり、一旦明和・安永頃、一般の陪臣住居へと変化した。このような変遷過程からみて、A図にみえる横山引馬は隆誨ではなく別人の可能性もある。しかし、今のところ、江戸中期で「引馬」を名乗るのは隆誨しか見当たらないので、宝暦大火後間もなく、彼に下屋敷地670歩の屋敷を与えたが、明和・安永期には一度移転したらしく、その

頃5人の陪臣屋敷に変化した。その後、天明6年に前田本家に仕官したあと、再び引馬隆誨の屋敷地となり、C図の時代（文化年間）を迎えたのである。下屋敷には、このように横山本家から分家し、藩直臣に登用された藩士の屋敷も存在したのである。

2 陪臣データ（一覧表）

[表3] ※番所について、() を付してあるものは、図中に「番所」の文字の記載がないものを示す。

連番	A図 横山家下屋敷図21・22号 家臣一覧					B図 下屋敷図23号 家臣一覧					C図 下屋敷図24号 家臣一覧				
	区域	地番	貼紙	家臣名	坪数	区域	地番	貼紙	家臣名	坪数	区域	地番	家臣名	坪数	
1	1	1	a	神戸 吉左衛門	176	1	1		神戸 吉左衛門	176	1	1	神戸 吉左衛門	175	
2	1	2	a	辰巳 助次郎	147	1	2		辰巳 助次郎	147	1	2	辰巳 与三大夫	147	
3	1	3	a	明石 弥兵衛	83	1	3		明石 弥兵衛	83	1	3	明石 増右衛門	83	
4	1	4	△	乾 新四郎	268	1	4-A	△	乾 彦四郎 拝借地	122	1	4-A	乾 彦四郎 拝借地	122	
						1	4-B	△	乾 彦四郎	145	1	4-B	乾 彦四郎	145	
5	1	5	△	竹内 貞次郎	100	1	5-6	△	乾 彦四郎 請地	50	1	5-6	乾 彦四郎 請地	54	
6	1	6	△	横山 幾久間	186	1	5-6	△	斉藤 伊織 拝借地	251	1	5-6	斉藤 順左衛門 拝借地	250	
7	1	7	△	斉藤 藤左衛門	265	1	7	△	斉藤 伊織	248	1	7	斉藤 順左衛門	248	
8	1	8		番所	10	1	8		番所	10	1	8	(番所)	(坪数不記)	
9	2	1	△	金子 弥助	155	2	1		金子 弥助	155	2	1	金子 弥助	155	
10	2	2	a	堀内 勘左衛門	149	2	2	△	堀内 左仲	149	2	2	堀内 源左衛門	149	
11	2	3	a	石黒 新左衛門	167	2	3		石黒 新左衛門	167	2	3	石黒 (苗字のみ記)	167	
12	2	4	a	斉藤 十左衛門	175	2	4		斉藤 十左衛門	175	2	4	斉藤 善左衛門	175	
13	3	1	△	二口 (苗字のみ記)	165	3	1		加々井 和平太	164	3	1	加々井 (苗字のみ記)	164	
14	3	2	c	向田 金太郎	140	3	2		(不記)		3	2	(不記)		
15	3	3	c	福岡 常人	140										
16	3	4		(人名不記)											
17	3	5		(人名不記)	217	3	5-15		米蔵	1,029	3	5-15	米蔵屋鋪	1,029	
18	3	6	▲	黒田 市郎右衛門	40										
19	3	7	▲	中林 勘兵衛	70										
20	3	8	▲	布崎 弥右衛門	50										
21	3	9	▲	中村 源兵衛	60										
22	3	10	△	瓜生 久兵衛	54										
23	3	11	△	河崎 万作	54										
24	3	12	△	林 陸郎	25										
25	3	13	▲	岡部 慎斎	80										
26	3	14	△	吉田 彦右衛門	50										
27	3	15	▲	鈴中 源兵衛	50										
28	3	16	a	吉岡 与四三	60	3	16		明地	89	3	16-24	(不記)		
29	3	17		(人名不記)		3	17		(不記)						
30	3	18	△	安田 庄太	70	3	18-21		(不記)						
31	3	19	▲	吉江 次郎吉	50	3									
32	3	20	△	高野 市左衛門	50	3									
33	3	21	▲	畑 又四郎	60	3									
						3	22		明地	82					
						3	23		山田 敬 半左衛門 上地	80					
						3	24	△	小川 九右衛門	79					
34	4	1	△	石黒 順左衛門	212	4	1	△	向坂 平兵衛	302	4	1	結城 源大夫	213	
35	4	2	a	松山 源太夫	303	4	2		松山 源太夫	227	4	2	松山 善兵衛	303	
36	4	3	△	大橋 七郎右衛門	212	4	3		結城 七郎左衛門	212	4	3	大橋 七郎右衛門	212	
37	4	4	a	松山 弥一右衛門	202	4	4		松山 弥一右衛門	202	4	4	松山 弥一兵衛	202	
38	4	5	△	長谷川 淳	156	4	5		山田 長大夫	156	4	5	長谷川 淳八	156	
39	4	6	△	山崎 十左衛門	179	4	6	△	春香院	179	4	6	伊藤 六大夫	179	
40	4	7	△	渋谷 潜蔵	130	4	7-8	△	明地	125	4	7	渋谷 平左衛門	130	
41	4	8	△	疋田 半十郎	172	4	7-8	△	疋田 新蔵 拝借地	18	4	8	(人名不記)	172	
						4	7-8	□	疋田 新蔵	160					
42	4	9	a	山北 六郎	137	4	9	△	山北 鍋吉	137	4	9	山北 九平	137	
43	4	10	a	石川 勘十郎	215	4	10		石川 勘十郎	215	4	10	石川 才作	215	
44	4	11		番所	10	4	11		番所	10	4	11	(番所)	(坪数不記)	
45	5	1	a	平手 五郎左衛門	416	5	1		平手 五郎左衛門	416	5	1	平手 忠左衛門	416	
46	5	2	△	渡部 武兵衛	217	5	2	△	渡部 武兵衛	217	5	2	渡辺 善大夫	217	
47	5	3	a	佐藤 鉄五郎	127	5	3-4		(不記)		5	3	(記載自体なし)		
48	5	4	a	深谷 庄九郎	93						5	4	(記載自体なし)		
49	5	5	a	高倉 権太夫	170	5	5	△	高倉 才治	170	5	5	高倉 才次	170	
50	5	6	d	小嶋 新九郎	240	5	6		小嶋 新九郎	240	5	6	小嶋 九兵衛	240	
51	5	7	△	太宰 孫九郎	158	5	7		太宰 孫助	171	5	7-A	太宰 孫助	171	
						5	8		長谷川 五右衛門	350	5	7-B	太才 孫助 請地	87	
						5	9	△	不破 左次馬	191					
52	6	1	c	横山 武右衛門	566	6	1	□	横山 帯刀	546	6	1	横山 武右衛門	546	
53	6	2	a	高沢 金次郎	774	6	2	△	高沢 猪右衛門	794	6	2	高沢 五左衛門	794	

連番	A 園 横山家下屋敷園21・22号 家臣一覧					B 園 下屋敷園23号 家臣一覧					C 園 下屋敷園24号 家臣一覧				
	区域	地番	貼紙	家臣名	坪数	区域	地番	貼紙	家臣名	坪数	区域	地番	貼紙	家臣名	坪数
54	6	3	d	荒木 太郎太夫	199	6	3	△	荒木 太郎太夫	199	6	3		荒木 源五兵衛	199
55	6	4	△	櫛古屋敷	162	6	4～5	△	随正院	123	6	4		櫛古所	222
56	6	5	a	上田 宗右衛門	490	6	4～5	△	明地	107	6	5		上田 清左衛門	450
						6	4～5	□	上田 宗右衛門	450					
57	7	1	a	小国 左源太	394	7	1		小国 左源太	394	7	1		小国 源右衛門	394
58	7	2	a	桑原 隼太	196	7	2		桑原 隼太	196	7	2		桑原 次右衛門	196
59	7	3	△	上田 祐七郎	128	7	3	△	林 玄通	140	7	3		福岡 源丞	128
60	7	4-1	△	渡辺 竜之助	119	7	4-1		明地	110	7	4-1		明地	128
						7	4-1		番所	10	7	4-1		(番所)	(坪数不記)
61	7	5	a	新飯田 森右衛門	200	7	5		新飯田 森右衛門	200	7	5		新飯田 太左衛門	200
62	7	6	△	寺本 弥五右衛門	106	7	6	△	土屋 八郎左衛門	120	7	6		寺本 弥五右衛門	106
63	7	7	a	中條 宇右衛門	148	7	7	△	中條 蔵左衛門	148	7	7		中條 平蔵	148
64	7	8	△	能本 仁右衛門	97	7	8～10		明地	172	7	8		原 桑次郎	97
65	7	9	△	長谷川 信蔵	205					130	7	9～10		アキチ	(坪数不記)
66	7	10	△	中村 長左衛門	83									明地	130
67	7	11-1	△	藤江 十蔵	116	7	11		白江 甚五左衛門	180	7	11		明地	180
68	7	12		番所	11	7	12		番所	10	7	12		(番所)	(坪数不記)
69	8	1	△	大榎御屋敷	912	8	1		(空)	1,478	8	1		横山 輔八郎 様	902
70	8	2	△	引馬	670	8	2-A		簡部 九次郎	317	8	2		横山 引馬 様	670
						8	2-B	△	上田 金大夫	105					
						8	2-C	△	井口 由代	80					
						8	2-D	△	藤田 故 七次 上地	122					
						8	2-E		原 宇左衛門	81					
71	8	3	△	大久保 又三郎	186	8	3	△	大久保 庄蔵	186	8	3		大久保 米之助	186
72	8	4	d	古河 九郎兵衛	199	8	4	△	古河 甚左衛門	199	8	4		古河 伝蔵	199
73	8	5	a	神戸 本右衛門	93	8	5		神戸 本右衛門	93	8	5		神戸 守人	93
74	8	6	d	丹家 鉄之丞	197	8	6		中村 蔵太	197	8	6		中村 内蔵太	197
75	9	1	c	池田 弥兵衛	(坪数不記)	9	1～9		杉蔵屋敷	(坪数不記)	9	1～9		杉蔵屋敷	565
76	9	2	c	沢井 志津江	95										
77	9	3	c	嶋村 将人	86										
78	9	4		空											
79	9	5	c	中山 徳兵衛	42										
80	9	6	c	乾 外次郎	137										
81	9	7	c	堀村 菊太郎	88										
82	9	8	△	宮村 武右衛門	44										
83	9	9	△	松能 小右衛門	45										
84	10	1	a	河村 甚五兵衛	167	10	1	△	河村 与助	157	10	1		河村 文内	157
85	10	2	a	岩本 林左衛門	95	10	2		岩本 林左衛門	95	10	2		岩本 和一郎	95
86	10	3-1	△	田中 八百三	175	10	3-1		佐久間 彦大夫	175	10	3-1		佐久間 与大夫	175
87	10	3-1	△	上田 金大夫	87	10	3-1		宮嶋 三郎兵衛 揚地	87	10	3-1		上田 金大夫	86
88	10	4	△	本 弥左衛門	79	10	4	△	原 静松	79	10	4		原 喜右衛門	79
89	10	5	△	宮川 助四郎	49	10	5	△	尾崎 和内	78	10	5		宮川 助四郎	49
90	10	6	△	林藤 作右衛門	57	10	6～7		平井 与兵衛	66	10	6		林藤 作右衛門	57
91	10	7	△	御番所	15						10	7		(番所)	(坪数不記)
92	11	1	△	水野 文次郎	95	11	1	□	福岡 並江	95	11	1		水野 文次郎	95
93	11	2	△	竹内 平兵衛	59	11	2	△	金子 武左衛門	59	11	2		長野 信蔵	59
94	11	3	△	渡部 左太夫	92	11	3	△	渡部 左太夫	92	11	3		渡部 金五右衛門	92
95	11	4	△	和崎 安右衛門	177	11	4	△	和崎 安右衛門	177	11	4		和崎 和多右衛門	177
96	11	5	△	辻番所	10	11	5		番所	10	11	5		(番所)	(坪数不記)
97	11	6	△	山科 幸蔵	55	11	6	△	河崎 勘七	49	11	6		河崎 嘉大夫	49
98	11	7	△	西沢 喜太夫	125	11	7		西沢 喜太夫	96	11	7		西沢 庄蔵	96
99	11	8	△	花野 七太郎	100	11	8	□	村田 八太夫	148	11	8		村田 伊兵衛	148
100	11	9	△	渡部 孫太夫	106	11	9	△	渡部 孫七	79	11	9		渡部 孫七	79
101	11	10	△	大橋 弥右衛門	221	11	10	△	大橋 弥右衛門	221	11	10		大橋 東馬	221
102	11	11	△	佐藤 豊左衛門	60	11	11	△	松本 藤治	92	11	11		松本 弥兵衛	92
103	11	12	△	増徳 金次郎	78	11	12	△	竹下 安左衛門	78	11	12		竹下 安大夫	78
104	12	1	a	広谷 右太夫	66	12	1	△	広谷 九郎右衛門	66	12	1		広谷 (苗字のみ記)	66
105	12	2	d	赤尾 幸平	96	12	2	△	赤尾 平蔵	76	12	2		赤尾 幸平	49
106	12	3	△	今村 市右衛門	53	12	3・5・6	△	木村 武大夫 拝借地	87	12	3・5・6		明地	87
						12	3・5・6	△	木村 武大夫	86	12	3・5・6		明地	86
107	12	4	△	広瀬 覚太夫	144	12	4	△	広瀬 覚太夫	125	12	4		広瀬 惣大夫	125
108	12	5	△	高橋 友左衛門	45										
109	12	6	△	堀村 市兵衛	45										
110	13	1	a	山倉 清右衛門	128	13	1		山倉 弥平太	128	13	1		山倉 寛九郎	128
111	13	2	△	堀内 源五左衛門	217	13	2	△	堀内 源五左衛門	217	13	2		堀内 善八	217
112	13	3	a	堀 昇助	383	13	3～4	△	堀 昇助	423	13	3～4		堀 八郎大夫	423
113	13	4	a	林へ入ル	39										
114	13	5	△	林 八郎	104	13	5		林 仁右衛門	104	13	5		林 八郎	104
115	13	6	△	田中 久太夫	208	13	6		田中 久太夫	188	13	6		田中 兵馬	188
116	13	7	△	杉本 満左衛門	190	13	7～9		杉本 満左衛門	150	13	7～9		杉本 六右衛門	150

連番	A 区 横山山下屋敷図21・22号 家臣一覧					B 区 下屋敷図23号 家臣一覧					C 区 下屋敷図24号 家臣一覧				
	区域	地番	貼紙	家臣名	坪数	区域	地番	貼紙	家臣名	坪数	区域	地番	家臣名	坪数	
117	13	8	△	堀 鉄太郎	135	13	7～9		堀 小矢太	345	13	7～9	堀 十郎左衛門	345	
118	13	9	d	齊藤 新左衛門	150										
119	14	1	△	結城 清左衛門	120	14	1～4	△	石黒 彦右衛門 拝借地	228	14	1	徳田 乙左衛門	126	
120	14	2	△	関口 五郎兵衛	120	14	1～4	△	石黒 彦右衛門	126	14	2	関口 五郎兵衛	120	
121	14	3	△	中嶋 瀬太夫	81	14	1～4	△	中嶋 治太夫	63	14	3	中嶋 瀬太夫	80	
122	14	4	△	園部 久次郎	262	14	1～4	△	太田 清左衛門	149	14	4	園部 金助	262	
123	14	5	△	宮崎 吉兵衛	67	14	5	△	吉崎 六郎左衛門	61	14	5	吉崎 六郎左衛門	61	
124	14	6	△	林 太郎右衛門	203	14	6	△	林 与一右衛門	203	14	6	林 太郎右衛門	203	
125	14	7	△	寺崎 平右衛門	59	14	7	△	奥野 円次	59	14	7	奥野 嘉蔵	59	
126	14	8	△	末友 吉太夫	86	14	8～9	△	片山 忠兵衛 揚地	202	14	8	末友 吉太夫	86	
127	14	9	△	金子 武左衛門	81						14	9	金子 源八	81	
128	15	1	△	辻番所	14	15	1		番所	10	15	1	(番所)	(坪数不記)	
129	15	2	△	松枝 彦七郎	120	15	2～3		松枝 金五右衛門	179	15	2～3	松枝 七兵衛	179	
130	15	3	a	中田 久太郎	53										
131	15	4	△	三浦 三右衛門	164	15	4		三浦 源兵衛	164	15	4	三浦 三右衛門	164	
132	16	1	△	竹橋 九郎太夫	50	16	1		杉若 磯右衛門	48	16	1	竹村 源蔵	48	
133	16	2	△	安田 村右衛門	44	16	2	△	山田 喜兵衛	40	16	2	安田 伸助	43	
134	16	3	△	中條 紋右衛門	53	16	3		清水 弥三右衛門 上地	51	16	3	中條 所平	51	
135	16	4	△	高桑 叱太	70	16	4～6		高桑 叱太	59	16	4	高桑 雅楽助	67	
136	16	5	△	高桑 弥左衛門	89	16	4～6		柳原 伝右衛門 上地	46	16	5	高桑 弥八郎	84	
137	16	6	△	中野 長右衛門	51	16	4～6		高桑 弥左衛門	41	16	6	中野 半助	49	
						16	4～6		御番 左津	49					
138	16	7	△	安村 清六	48	16	7		山本 藤次 上地	46	16	7	安村 善兵衛	46	
139	16	8	△	野村 善九郎	48	16	8	△	渡部 与三左衛門	46	16	8	渡部 与三左衛門	46	
140	16	9	△	後藤 彦兵衛	46	16	9		後藤 彦兵衛	45	16	9	後藤 勇八	45	
141	16	10	△	増田 小右衛門	49	16	10	△	高桑 豊蔵	48	16	10	増田 小右衛門	48	
142	16	11	△	橋本 治助	48	16	11		内田 直右衛門 揚地	46	16	11	橋本 半太夫	46	
143	16	12	△	吉村 丹六	48	16	12	△	吉村 藤太	46	16	12	吉村 藤助	46	
144	16	13	△	神戸 清右衛門	62	16	13		高嶋 吉郎左衛門	59	16	13	沢本 周助	59	
145	17	1	△	小泉 乙次郎	56	17	1		西爪 故 庄右衛門 揚地	39	17	1	足輕橋古所	39	
146	17	2	△	林 久助	154	17	2-A	△	林 久助	63	17	2	林 久助	154	
						17	2-B		佐久間 津左衛門 揚地	45					
						17	2-C		小林 彦左衛門	46					
147	17	3	△	(人名・用途不記)	23	17	3・13	△	出口 林七	69	17	3	(人名・用途不記)	23	
148	17	4	△	堀島 権九郎	80	17	4		高桑 故 由知 揚地	64	17	4	堀嶋 源五右衛門	80	
149	17	5	△	山岸 伊兵衛	48	17	5		奥野 故 弥一兵衛 揚地	48	17	5	平沢 源兵衛	48	
150	17	6	△	宮川 清蔵	45	17	6		高桑 故 忠右衛門 揚地	48	17	6	上村 源七	45	
151	17	7	△	山田 喜兵衛	60	17	7		西沢 故 庄蔵 揚地	45	17	7	山田 半助	60	
152	17	8	△	高桑 喜助	105	17	8		坪田 三太夫	105	17	8	高桑 市右衛門	105	
153	17	9	△	石野 長太郎	50	17	9		見影 安兵衛	50	17	9	見影 清助	50	
154	17	10-イ	△	長谷川 専吾	52	17	10-イ		小竹 半次	35	17	10-イ	小竹 虎助	35	
155	17	10-ロ	△	(番所)	(坪数不記)	17	10-ロ		番所	8	17	10-ロ	(番所)	(坪数不記)	
156	17	11	b	加納 円左衛門	63	17	11		加納 円左衛門	63	17	11	加納 文次	63	
157	17	12	△	原 団七	63	17	12		赤尾 平蔵 揚地	63	17	12	原 団七	63	
158	17	13	△	岡本 長蔵	37						17	13	岡本 長蔵	64	
159	17	14	b	小林 勘兵衛	91	17	14		小林 勘兵衛	91	17	14	小林 沢次郎	91	
160	17	15	△	郡山 伊大夫	50	17	15	△	郡山 長兵衛	50	17	15	郡山 伊大夫	50	
161	17	16	△	藤田 清作	45	17	16		長江 文蔵	45	17	16	長江 文蔵	45	
162	17	17	△	高嶋 吉郎太夫	81	17	17		橋本 紋太夫	81	17	17	橋本 良助	81	
163	17	18	△	吉村 丹次	48	17	18	△	高嶋 政右衛門	48	17	18	友田 津左衛門	48	
164	17	19	△	瀬戸 宇兵衛	47	17	19		二口 留次郎 上地	47	17	19	瀬戸 忠大夫	47	
165	17	20	△	宮嶋 弥助	55	17	20	△	田中 故 小左衛門	55	17	20	田中 平助	54	
166	18	1	△	木村 源八	74	18	1		木村 仁左衛門	50	18	1	木村 源八	52	
167	18	2	△	坂本 与左衛門	45	18	2	△	林 弥七郎	52	18	2	堀田 文助	52	
168	18	3	△	柳瀬 弥五左衛門	52	18	3	△	柳瀬 弥五左衛門	52	18	3	柳瀬 清蔵	52	
169	18	4	△	小林 喜三右衛門	50	18	4	△	小林 喜三右衛門	50	18	4	小林 彦左衛門	50	
170	18	5	△	広谷 宇右衛門	80	18	5		広谷 嘉三右衛門	56	18	5	広谷 宇右衛門	56	
171	18	6	△	内田 右大夫	52	18	6		内田 平助	52	18	6	内田 右大夫	52	
172	18	7	△	堀内 元右衛門	49	18	7	△	堀内 彦承	49	18	7	堀内 寛次郎	49	
173	18	8	△	松山 文左衛門	62	18	8		高桑 伴太夫	54	18	8	高桑 勇五郎	62	
174	18	9	△	柴野 市蔵	48	18	9	△	柴田 小四郎	90	18	9	明地	82	
175	18	10	△	屋後 権右衛門	136	18	10	△	屋後 兵次郎	102	18	10	屋後 権右衛門	102	
176	18	11	△	吉室 平右衛門	45	18	11		清水 兵太夫 揚地	56	18	11	吉室 平右衛門	45	
177	18	12	△	村田 平大夫	49	18	12		高橋 八左衛門 揚地	42	18	12	林 吉兵衛	42	
178	18	13	△	武部 権左衛門	66	18	13		小川 左内 上地	59	18	13	武部 長左衛門	59	
179	18	14	△	沖田 善助	43	18	14		尾崎 和内 上地	43	18	14	沖田 善助	43	
180	18	15	△	松能 忠兵衛	46	18	15		西村 伴丞	81	18	15	西村 三丞	81	
181	18	16	△	北村 十右衛門	60	18	16		郡山 長兵衛 上地	50	18	16	北村 十右衛門	47	
182	18	17	△	吉村 宗兵衛	54	18	17		吉村 惣兵衛	49	18	17	吉村 他郎吉	54	
183	18	18	△	安田 作兵衛	55	18	18		清水 村次	55	18	18	清水 孫大夫	55	

連番	A 園 横山家下屋敷園21・22号 家臣一覧					B 園 下屋敷園23号 家臣一覧					C 園 下屋敷園24号 家臣一覧				
	区域	地番	貼紙	家臣名	坪数	区域	地番	貼紙	家臣名	坪数	区域	地番	家臣名	坪数	
184	18	19	△	中宮 甚右衛門	47	18	19		井村 辰太夫 上地	47	18	19	中宮 仙右衛門	47	
185	18	20	△	小坂 勝右衛門	48	18	20	△	小坂 勝右衛門	48	18	20	小坂 茂助	48	
186	18	21	△	竹村 次左衛門	46	18	21	△	石黒 左助	46	18	21	竹村 次左衛門	46	
187	18	22	△	出口 兵左衛門	65	18	22		池田 久吾	54	18	22	明地	65	
188	19	1	△	鈴木 久大夫	126	19	1	△	小林 多仲	126	19	1	鈴木 清大夫	126	
189	19	2	a	清水 万右衛門	89	19	2		清水 万右衛門	89	19	2	清水 才右衛門	89	
190	19	3	△	小川 仙次郎	253	19	3	△	小川 与五兵衛	253	19	3	小川 与五兵衛	253	
191	19	4		(番所)	4	19	4		番所	坪数不記	19	4	(番所)	(坪数不記)	
192	20	1	△	入江 兎左衛門	142	20	1-A	△	入江 兎左衛門	79	20	1-A	入江 兎左衛門	79	
						20	1-B		高橋 新六	63	20	1-B	高橋 平蔵	63	
193	20	2	△	今村 里大夫	70	20	2	△	下田 嘉七郎	70	20	2	今村 長左衛門	(坪数不記)	
194	20	3	△	杉若 団助	91	20	3-A		広瀬 三郎左衛門 揚地	64	20	3	杉若 団助	91	
						20	3-B		明地	27					
195	20	4	△	松尾 伊織	96	20	4	△	丹家 浅右衛門	96	20	4	丹家 鉄之丞	96	
196	20	5	a	中川 甚八	237	20	5	△	中川 甚八	237	20	5	中川 甚八	237	
197	20	6	△	吉川 平六郎	152	20	6	△	小林 甚助	158	20	6	小林 十郎右衛門	158	
198	20	7	△	平井 勘大夫	82	20	7		窪田 平八郎	82	20	7	平井 勘大夫	82	
199	20	8	△	二口 冬蔵	107	20	8	△	藤田 義左衛門	80	20	8	二口 冬蔵	80	
200	20	9	△	越谷 佐平	52	20	9	△	吉田 喜右衛門 永代請地	35	20	9・15	吉田 林右衛門	60	
201	20	10	△	依田 左馬	186	20	10-A		嶋崎 鉄次郎	70	20	10	依田 左守	147	
						20	10-B	△	依田 弥十郎	66					
202	20	11	△	林 用助	48	20	11	△	林 用助	48	20	11	林 用助	48	
203	20	12	△	小竹 半次	80	20	12		高桑 直右衛門	80	20	12	山崎 武助	106	
204	20	13	△	徳田 七大夫	120	20	13	△	徳田 七大夫	120	20	13	徳田 半人	120	
205	20	14	△	藤田 勇太郎	66	20	14	△	加納 孫左衛門	61	20	14	加納 孫左衛門	6□	
206	20	15	△	矢萩 文右衛門	48	20	15	△	吉田 喜右衛門	60					
207	20	16	△	坂井 勇大夫	67	20	16	△	松田 次郎左衛門	87	20	16	松田 材十郎	87	
208	20	17	△	小林 与右衛門	85	20	17~18		吉川 新右衛門	46	20	17	吉川 平六郎	85	
209	20	18	△	松能 庄八	60	20	17~18		加納 寛丞 揚地	48	20	18	森田 作左衛門	50	
						20	17~18	△	森田 宗兵衛	41					
210	21	1	△	松本 宗助	57	21	1-A		嶋村 貞右衛門	49	21	1-A	嶋村 貞右衛門	49	
						21	1-B		小杉 嘉太夫 揚地	44	21	1-B	安田 作兵衛	44	
211	21	2	a	沖田 市次	62	21	2	△	沖田 市郎右衛門	51	21	2	沖田 友四	51	
212	21	3	△	立野 又次郎	63	21	3		高橋 八左衛門	63	21	3	高橋 平六	63	
213	21	4	a	吉村 弥大夫	82	21	4		吉村 弥太夫	82	21	4	吉村 東作	82	
214	21	5	△	鈴木 勘次郎	46	21	5~6		堀酒 (煙硝) 蔵	97	21	5~6	堀酒 (煙硝) 蔵屋鋪	97	
215	21	6	△	上村 平六	46										
216	21	7	△	出口 儀隆	68	21	7-8-9-10		的場	154	21	7-8-9-10	的場	154	
217	21	8	△	増永 金太郎	58	21	7-8-9-10		(人名・用途不記)	72	21	7-8-9-10	堀酒 (煙硝) 干場	(坪数不記)	
218	21	9	△	村上 準平	57										
219	21	10	△	加藤 清吉	42										
220	21	11	△	宮崎 源五大夫	81	21	11	△	宮崎 源五大夫	89	21	11	宮崎 昇助	89	
221	22	1	a	坂井 知左衛門	71	22	1	△	坂井 知左衛門	71	22	1	坂井 雅大夫	71	
222	22	2	△	加納 勇左衛門	96	22	2・18	△	加納 豊大夫	96	22	2・18	加納 左一郎	96	
223	22	3	△	瀬戸 与右衛門	53	22	3	△	柴田 金大夫	53	22	3	高桑 伝左衛門	53	
224	22	4	△	村沢 忠大夫	60	22	4	△	宮崎 吉右衛門	60	22	4	宮崎 勘兵衛	60	
225	22	5	△	鈴木 武太夫	55	22	5		木村 太兵衛	55	22	5	木村 奎左衛門	55	
226	22	6	a	西沢 庄左衛門	89	22	6		西沢 庄左衛門	99	22	6	西沢 貞蔵	99	
227	22	7	△	中條 和大夫	55	22	7	△	梅村 千助	55	22	7	中條 和大夫	55	
228	22	8	△	窪生 太助	53	22	8		窪生 新八	53	22	8	窪生 弥右衛門	53	
229	22	9	a	池田 金左衛門	50	22	9		池田 金左衛門	50	22	9	池田 理助	50	
230	22	10	△	安達 勘蔵	55	22	10		今村 庄右衛門	55	22	10	安達 勘蔵	55	
231	22	11	△	窪田 与三大夫	103	22	11-A		安村 善蔵	50	22	11-A	(人名不記)	22	
						22	11-B		窪田 喜大夫	53	22	11-B	窪田 造酒	81	
232	22	12	△	山村 八左衛門	51	22	12		松村 六左衛門	51	22	12	松村 六左衛門	51	
233	22	13	△	岡本 和次郎	62	22	13		藤江 円太	51	22	13	藤江 十蔵	62	
234	22	14	△	井上 勘左衛門	46	22	14	△	五十嵐 九平	61	22	14	井上 勘左衛門	46	
235	22	15	△	井村 多左衛門	96	22	15	△	井村 多左衛門	96	22	15-A	井村 多左衛門 うけち	16	
											22	15-B	井村 多左衛門	80	
236	22	16	△	金浦 左平	51	22	16		高桑 七左衛門 上地	51	22	16	金浦 次平	51	
237	22	17	△	清水 孫作	56	22	17	△	清水 友右衛門	71	22	17	清水 友丞	71	
238	22	18	△	(人名不記)											
239	22	19	△	高木 文次	44	22	19-A	△	明地	39	22	19-A	明地	39	
						22	19-B	△	明地	24	22	19-B	明地	24	
240	22	20	△	高桑 伝左衛門	71	22	20	△	出口 兵左衛門	56	22	20	出口 兵左衛門	96	
241	23	1	a	服部 伊兵衛	440	23	1		服部 伊兵衛	440	23	1	服部 忠右衛門	440	
242	23	2	a	村田 右内	200	23	2		村田 右内	200	23	2	村田 千助	200	
243	23	3	a	堀 角左衛門	194	23	3	△	堀 角左衛門	194	23	3	堀 淳吉郎	194	
244	23	4	△	石原 紋兵衛	88	23	4	△	石原 新兵衛	88	23	4	石原 五郎左衛門	88	
245	23	5	△	太田 宗元	85	23	5		太田 宗元	(85)	23	5	太田 宗寿	85	

A図 横山家下屋敷図21・22号 家臣一覧					B図 下屋敷図23号 家臣一覧					C図 下屋敷図24号 家臣一覧				
連番	区域	地番	貼紙	家臣名	坪数	区域	地番	貼紙	家臣名	坪数	区域	地番	家臣名	坪数
246	23	6	△	新飯田 治大夫	98	23	6-A		服部 伊兵衛 請地	28	23	6	新飯田 治大夫	98
						23	6-B	△	石原 新兵衛 請地	23				
						23	6-C		(人名不記)	37				
						23	6-D	△	森田 宗兵衛	9				
247	23	7	△	山口 六郎	62	23	7~13		(記載自体なし)		23	7~13	(記載自体なし)	
248	23	8	△	生嶋 伝兵衛	45									
249	23	9	△	加藤 長兵衛	45									
250	23	10	△	広永 与七	71									
251	23	11	△	深谷 庄大夫	62									
252	23	12	△	清水 友之丞	82									
253	23	13	△	能本 金右衛門	82									
254	24	1	△	赤尾 昌左衛門	89	24	1~2	△	谷 市郎左衛門	62	24	1~2	赤尾 昌之助	62
255	24	2	△	梅村 森江	115	24	1~2	△	佐藤 伝丞	61	24	1~2	佐藤 極蔵	61
						24	1~2	△	清水 平大夫	80	24	1~2	梅村 権六	80
256	24	3	△	印牧 少兵衛	124	24	3の一部	△	印牧 十三郎	106	24	3	印牧 少兵衛	124
257	24	4	△	稲野 祐 []	100	24	4	△	稲野 右兵衛	100	24	4	稲野 十郎兵衛	67
258	24	5	△	太田 宗蔵	67	24	5・3の一部		出口 沖右衛門	86	24	5	太田 宗蔵	67

以上に掲げた〔表3〕は、A図・B図・C図に書かれた陪臣名と敷地面積などを解読し、筆者の方で与えた地番とともに一覧にしたものである。〔表3〕で3枚の絵図の内容を相互に比較すれば、地番ごとに宝暦年間から文化年間にかけ、どういった変遷があったか概観できる。また、A図・B図の貼紙には、C図が成立した文化13年以後の情報を書き込むこともあったので、さらに詳細な検証も必要である。

なお、地番の与え方は、上屋敷のある北西区では街区ごと1～10区に分け、南東地区では11～24区まで14区に分け（全24区）、各区内をさらに陪臣敷地ごとに地番を付与した。全24区的位置は次頁の写真に示した通りである。地番はA図を基本に付与したが（なお、あとで地番補正をしたとき追加したものは「2-イ」、「2-ロ」と表記してある）、B図・C図で該当地番が細分化されていた場合、「2-A」「2-B」と分筆表記とした。B図・C図で大きく区画統合されている場合は、「1～3」というように地番表示したが、正確な区画の統合状況を知るには、原本を閲覧する必要がある。このように3図の間で屋敷区画割線が変動した場合、表記に工夫はしたが、あくまで大まかな変遷状況しか表示できなかった点を断っておきたい。なお、〔表3〕に書かれた貼紙欄の記号等については、1節の個別絵図の説明を参照されたい。

〔付記〕 なお、このデータ作成や陪臣名の解読整理などは、主に池田が実務を担当し、木越が総括した。景観年代等について議論した結果を木越の責任で記述した。また石野友康も、この間の作業を側面から支えており、データ入力等にあたり、松田（旧姓村上）純子の協力を得た。

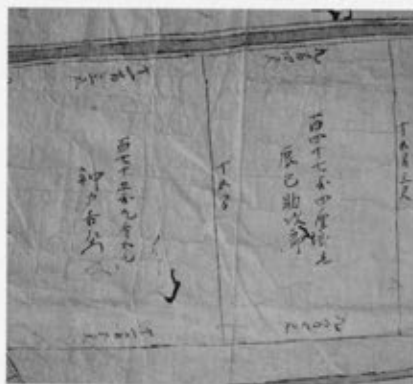
〔註〕

- (1) 矢守一彦『都市プランの研究』（大明堂、1970年）。同『城下町のかたち』（筑摩書房、1988年）。
- (2) 吉田伸之「近世の城下町・江戸から金沢へ」（週刊朝日百科『日本の歴史 別冊・歴史の読み方2』1988年）。
- (3) 『前田土佐守家資料館図録』4章（金沢市、2002年）。谷口明伸・増山仁「前田土佐守家の下屋敷と醒ヶ井遺跡」（『金沢市文化財団研究紀要』1号、2004年）。
- (4) 木越隆三「『延宝金沢図』にみる城下町の空間構造」（『年報都市史研究』14、2006年）。
- (5) 木越隆三・池田仁子「横山家の家臣団と家中統制」（『金沢城代と横山家文書の研究』金沢城研究調査室編、2006年）。木越隆三「城下町の中に城下町」（『北國文華』35号 2008年3月）。同「複合城下町金沢と加賀八家」（『北國新聞』文化欄、2008年2月7日付）など。
- (6) 横山家文書（六）家政150～179号。
- (7) 『加賀藩史料』2。
- (8) (9) 「諸士系譜」加越能文庫、金沢市立玉川図書館所蔵。

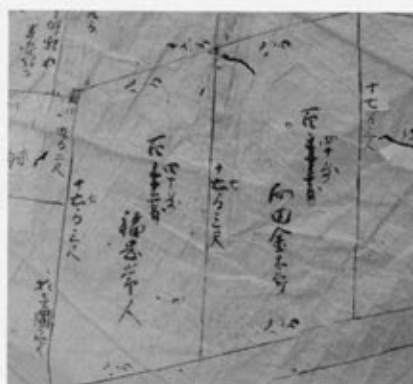


横山家下屋敷の住居区分（B図の上に加工表示）

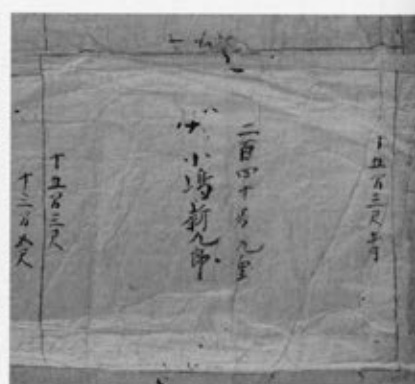
横山家A図にみられる主な筆跡



筆跡例 a



筆跡例 b



筆跡例 c

※なお、昨年刊行した金沢城研究調査室編『金沢城代と横山家文書の研究』は、石川県庁1階行政情報サービスセンターで販売中（定価1430円）。